

## 明治の巨星——事業と人生

日本土木史シンポジウムをふまえて

### ① 古市公威

金 関 義 則\*



#### 1. 最初の文部省留学生

古市公威は安政元年（1854年）に、姫路藩士の嫡男として生まれた。明治維新に先立つ14年前のことである。祖父も父も藩士の身近に仕えており、幼少より文武にはげみ、その才幹は、早くから藩内で認められていた。明治2年1月に洋学を授ける開成所が創設されるや、ただちに入学し、語学は仏語を選んだ。開成所は同年12月に大学南校と改称した。政府は明治3年10月に貢進生の制度を設け、各藩に命じて人材を選んで大学南校に入学させることとなり、古市公威

\* Yoshinori KANESEKI, 正会員 科学技術史家

は石本新六とともに姫路藩の貢進生として大学南校で勉強することとなった。ところが、明治4年7月に廃藩置県が実施され、大学南校は南校と改称され、同年9月に南校は閉鎖され貢進生は退学を命ぜられた。同年10月に貢進生のうち優秀なものを選んで再び入学させた。明治5年8月に南校は第一大学区第一番中学と改称された。さらに、明治6年4月に第一番中学は開成学校と改称され、古市のように仏語を選んだ生徒のために諸芸学科が設けられた。明治7年5月に開成学校は東京開成学校と改称されたが、文部省の管掌する官立大学らしいものがようやくできたことになる。しかし、英語で学ぶ法学科、化学科、工学科と、仏語で学ぶ諸芸学科、独語で学ぶ鉱山学科しかなかったため、仏語、独語生徒は英語に転科して法学、化学、工学を選ぶか、東京開成学校を去って、仏語、独語を活かせる方面に進まなければならなかった。古市は迷うことなく仏語諸芸学科で勉学し、首席生徒として活躍した。すなわち、法学科の斎藤修一郎、小村寿太郎、化学科の長谷川芳之助、鉱山学科の安東清人とともに全校生徒の先頭に立って、最高学府としての東京開成学校の学風高揚に邁進し、五人組の勇名をほしいままにした。文部省に対して、優秀な生徒を選んで海外に留学生を送れと迫り、ついに明治8年7月に最初の留学生を送ることとなったのは特筆大書してよからう（校長の畠山義成、校長補の浜尾 新の理解と奔走なしには実現できなかった）。英語法学科の嶋山和夫、小村

寿太郎、菊池武夫、斎藤修一郎（選抜の成績順、以下同様）、英語化学科の松井直吉、長谷川芳之助、南部球吾、英語工学科の平井晴次郎、原口 要、仏語諸芸学科の古市公威、独語鉱山学科の安東清人の 11 名が選ばれて、憧れの海外留学に旅立っていった（翌年も 10 名が第 2 回の海外留学生に選ばれるが、翌々年には東京開成学校は東京医学校と合併して東京大学となり、成績優秀な卒業生が助教授、教授要員として留学することとなる）。

第 1 回の文部省留学生は優秀な成績をあげ留学の目的を果たしたが、そのなかでも古市の成績は光っていた。しかしながら、帰国して東京大学の講師となり教授となったのは松井直吉（理学部）、鳩山和夫（法学部）だけであった。鳩山は外務省に入って取調局長、翻訳局長になり、法科大学教授を兼任するが、大隈重信外相が条約改正で失脚したあと、明治 23 年 1 月に官途を去って弁護士となる。やがて、弁護士の地位向上、立憲政治の実現、私学の発展を目標に掲げ、衆議院議員、早稲田大学校長として活動する。鳩山に代わって官学の法学の代表者となったのは、第 2 回の留学生として、イギリス、ドイツに学んだ穂積陳重で、法学部長、法科大学長となった。松井も明治 14 年に理学部教授となったが、18 年に工芸学部に移り、さらに、19 年に工科大学に移った。26 年に農科大学が設けられるや教授兼学長として迎えられた。松井の去った理学部の化学科を支配し、やがて理科大学長となったのは、第 2 回留学生としてイギリスに学んだ桜井錠二であった。

古市公威は明治 12 年 8 月にエコール・サントラルを卒業し、ついで 13 年 7 月にパリ大学理学部を卒業した。古市の帰国を待ちわびていた父は 12 年 5 月に 50 才で病没している。12 年 2 月には妹のらくが女子師範学校（東京女子高等師範学校、お茶の水女子大学の前身）を卒業している。女子師範学校は女子教育の最高機関で、当時は小学師範科しかなく、高等師範科から卒業生が送り出されるようになるのは 24 年 3 月からである。帰国した古市を迎え入れたのは、留学を命じた文部省ではなく内務省であった。明治 11 年 5 月 1 日から 11 月 10 日まで開かれたパリ万国博に、日本側の万国博副総裁としてやってきた松方正義（勸業局長）が、13 年 2 月から内務卿になっていた。パリ駐在公使であった薩摩藩出身の岐島尚信が古市の学業を高く評価しており、岐島の助言もあって松方は土木局で古市が活躍することを期待したのであった。

## 2. 時代の要請、縦横の活躍

明治 18 年 12 月 22 日に、太政官制が廃止されて内閣制度が発足した。19 年 3 月に東京大学は改組されて帝

国大学となった。唯一の最高学府である帝国大学は、法科、医科、工科、文科、理科の分科大学から成り、工科大学は東京大学工芸学部と工部大学校とを統合したものであった。工部大学校の生徒も教師も工部大学校が廃止されることに反対したので、工科大学長心得を兼任した理科大学長の菊池大麓は、窮地に陥った。見かねた浜尾新（東京大学総理補）が対処できるのは古市以外になしと判断して奔走し、ついに 19 年 5 月に古市が工科大学長に就任することとなった。17 年 3 月から新潟にあって信濃川、阿賀川、庄川などの土木局直轄工事を監督していた古市を 16 年 12 月から内務卿となり、18 年 12 月から内務大臣となった山県有朋は手放すことができず、土木局兼務を命ずることにした。古市は、河川、運河、港湾工学を講義するだけでなく、高い水準を旨として工科大学の整備に心くだかねばならなかった。それと同時に、土木局では全国を六区に分けて土木監督署を設け、巡視長、巡視を配置したが、新しい体制が根づくのに手間どった。土木監督署はやがて土木出張所と改称され、戦後の地方建設局に発展していった。

山県は 21 年 11 月から 22 年 9 月にかけてヨーロッパに出張するが、ヨーロッパ留学の経験ある文官、武官を選んで随員とした。日清戦争に対する戦備、地方自治制度の調査を目的とする出張であったが、古市は工科大学長を辞任し首席随員として参加した（古市が帰国して再任されるまで、総長の渡辺洪基が工科大学長事務取扱に任ぜられた）。山県の出張は多くの成果をあげ、随員のなかでも古市の活動は著しいものがあつた。23 年 6 月に山県は古市を抜擢して土木局長に任じ、工科大学教授、工科大学長が兼務ということになった。24 年 8 月には監督署長として東京に石黒五十二、仙台に小林八郎、新潟に小柴保人、大阪に沖野忠雄、広島に日下部弁二郎、久留米に岡 胤信を配置して土木監督署体制を名実ともに上げることができた。

工部大学校卒業生が 12 年 11 月に結成した工学会に、古市は 20 年 11 月に入会し、21 年 1 月以降は幹事に選出され、会長（山尾庸三）、副会長（渡辺洪基）ついで榎本武揚）を助けて工学会を発展させた。23 名で出発した会員が 10 年で 1200 名に達し、22 年 8 月に臨時大会を開催したとき、大会委員長として古市は“昨年のパリ万博を見て、工学会の前途は遠慮であり、会員の一層の奮起を望まざるを得ない”と叫んでいる。11 年ごとに開かれるパリ万国博から各国における科学・技術の現在、未来をうかがう視野の広さを想うべきである。このとき、すでに古市は、日本の工学を代表する実力者になっていた。27 年 6 月に土木技監が設けられ古市が就任し、土木局長を継承したのは山県のヨーロッパ出張を現地で助けた都築馨六であった。土木技監は内務次官なみで、後

年の内務技監が土木局長の下位にあることは大いに相違していた。27年8月には日清戦争が始まり、京城—釜山鉄道のないために将兵がなめる痛苦を古市は座視するに耐えなかったようである。明治24年5月にシベリア鉄道起工式に列席しようとして来日したロシア皇太子が、大津で警官に刺されて朝野が動揺したことを考えあわせて、古市は東アジアの鉄道網をあれこれと案ずるのであった。ロシアの南進を恐れる山県の実慮に、古市はかねてから共感をいだいていた。

### 3. 志を果たして去る

国会が開校された23年9月、古市公威は帝国大学の要職にあった加藤弘之、外山正一、菊池大麓、穂積陳重、小中村清矩とともに最初の勅選議員として、貴族院に議席を与えられた。古市は大正13年に相密顧問官になるが、それまでの長い期間(33才から70才にかけて)貴族院議員としての責務を熱心に果たしている。内務大臣として古市の才腕を思うがままに振寄せた山県有朋の恩顧を、古市は述べたり記したりしていないが、つねに忘れはしなかったであろう。明治31年6月に伊藤博文内閣(第三次)が倒れ、大隈重信内閣ができたとき、内務大臣の板垣退助の慰留するのを振り切って、古市公威は土木技監兼土木局長を辞任した。それだけでなく、兼務の工科大学教授兼工科大学長も辞任して帝国大学を去っていった。藩閥政治の打倒を叫び、板垣退助、大隈重信を支持する気運が強まってくとき、古市は山県を支持する人びととともに野に下ったのである。それと入れかわるように、当時の衆議院議長だった鳩山和夫は、外務次官として外務省に帰り咲いた。大隈内閣は内部の派閥抗争でまもなく瓦解して、31年11月に山県有朋内閣(第二次)が発足する。古市はもはや内務省に復帰することなく、通信次官として迎えられたのは、土木関係の人びとには意外と映ったであろう。そのころ創立された帝国鉄道協会(会長は川上操六大将、副会長は渡辺洪基、松本莊一郎)に、最初から古市は評議員として参加し、ついで、理事、副会長として尽力し、大正13年5月には著しい功績ありとして名誉会員に推挙されている。薩摩藩出身の参謀総長だった川上は過労でまもなく倒れるが、川上のロシア対策を知る古市は早逝を悲しまずにいられた。明治36年12月に京釜鉄道株式会社総裁に就任した古市は、現地におもむいて京城—釜山鉄道の速成を督励した。37年11月に建設工事が完了したあとも朝鮮にとどまり、39年6月には韓国統管府鉄道管理局長官となって鉄道の戦後処理にあたった。日露戦争の論功行賞が華々しく行われたとき、京城と義州を結ぶ軍用鉄道の速成にあたった武官が男爵になったが、古市は

勲三等から勲一等への昇叙にとどまった。しかし、古市は朝鮮における鉄道網の根幹を整えたことに心から満足し、ことさら自己の功績を論議したりはしなかった。

40年6月に古市は韓国統管府を去ったが、41年6月には日本大博覧会の評議員に、また、42年4月には日英博覧会の評議員になっている。日本大博覧会は明治45年4月から10月にかけて陸々たる国勢を示そうとするもので、呼びかけに応じてアメリカも参加を決定したが、日本側の財政困難で実現しなかった。日英博覧会は明治35年に結ばれた日英同盟にちなむもので、37年の英仏協商を謳歌して41年にロンドンで開かれた英仏博覧会にならった友好行事と見なされた。これらの博覧会は、また、ロシア、ドイツに対して大英帝国の国勢を誇示する祭典でもあった。43年にロンドンで催された日英博覧会に出席した古市は、ロンドン滞在中につぶさに地下鉄の機能、経営を調査して、大都市内部の高速交通手段としての地下鉄を評価するようになった。大正9年8月に東京地下鉄道会社の社長に就任したのも、土木の大御所として事業家に利用されたわけではなかった。

### 4. 散りゆく豪傑たち

これから科学・技術はどのように発展するか、いよいよ好奇心を燃やしているとき、開成学校で熱烈に天下国家を議論した豪傑が次々と病死していった。すなわち、明治43年5月には斎藤修一郎(武生藩出身)が、44年2月に松井直吉(大垣藩)が、44年10月に鳩山和夫(真島藩)が、44年11月には小村寿太郎(肥後藩)が、45年7月には菊池武夫(南部藩)が他界した。開成学校で英語生徒として激しく首席を争った鳩山、小村、菊池、斎藤がすべて消えて、その後に続いた秀才が生き残ったのは皮肉である。アメリカ留学から帰国して、いち早く外務省に入り、外務卿の井上馨の腹心となった斎藤は、高橋是清から大臣よりも傲慢だと非難されるほど手腕を振った。アメリカ留学から帰国して司法省に入り裁判所判事になったが不遇、不満に悩む小村寿太郎を明治17年6月に外務省に迎え、19年3月に翻訳局次長にすえたのは斎藤であった(そのときの翻訳局長を兼務していたのは取調局長の鳩山和夫である)。それからまた、司法省法学校を明治12年に退学し、郵便報知新聞、大東日報で記者活動をした原敬を外務省に迎え、井上馨、陸奥宗光から重用され、28年10月に外務次官に累進する機会を与えたのも斎藤であった。その斎藤は明治21年7月に農商務大臣となった井上馨に招かれて農商務省に移り、商工局長、農務局長を歴任し、後藤象二郎が大臣になると農商務次官として存分に手腕を発揮した。ところが、取引所設置をめぐる収賄事件で改進黨に

よって弾劾されて衆議院議長の星亨が失脚し、後藤も斎藤も27年1月に辞任することとなった。失脚した後藤、斎藤も星も駐韓公使の非上 弊に拾われて韓国顧問となるが、後藤は30年8月に病死し、星は34年6月に暗殺され、斎藤も次々に手掛けた事業が失敗して困窮で窮死した。

小村孝太郎は父の負債が返却できず債鬼に追われると登庁もできないという貧乏ぶりで、開成学校以来の旧友である菊池武夫、杉浦重剛、高橋健三、鳩山和夫の助力によって危機を幾度も救われた。浜尾 新の頼みで鳩山が翻訳局長を辞任して、小村が次長から局長に昇進したのは21年10月であったが、その翻訳局長も26年11月の官制改革で廃官となることになった。このとき再起の機会を与えたのは、かねて小村の才能を認めていた陸奥宗光であった。26年10月に公使館参事官として北京在勤を命ぜられ、11月には臨時代理公使として目を見はる活動が始まった。29年6月には外務次官となり、34年9月には桂太郎内閣の外務大臣となる。日英同盟の功績で35年4月には男爵、日露戦争の功績で40年9月に伯爵、日露協商、条約改正の功績で44年4月に侯爵を授けられた。陸奥の亡くなったあと、小村を重用したのは桂 太郎で、56才で仆れることなく寿命を恵まれれば、非凡の才能を幾度か活かしたのであろうと、古市は惜しまずにいらなかった。開成学校の五人組のなかでも小村は「俺は参議になる」とうそぶき、ただの英語上手でないことが早くから認められていたからである。

小村に先立って病没した松井直吉、鳩山和夫については、哀惜もさらに切実なものがあつた。海外留学から帰国したとき、欧米から多くのものを学ばなければならないが、能楽はオペラに匹敵する古典芸能なりとする古市に共鳴して、梅若流にはげんだのが松井と鳩山であった。明治14年11月、鳩山和夫が松本藩大参事の五女である多賀春子と結婚したとき、木邦最初の披露宴なるものに古市は妹のらくとともに出席し、門途を祝福して仕舞を演じている。春子は女子師範学校の第1回卒業生の古市らく、水野みね（菊池武夫と結婚）と親しかっただけでなく、古市公威の夫人となった川名こう、沖野忠雄の夫人となった猪子ふでとともに第6回卒業生となっている。鳩山春子は結婚における男女同権を主張し、春子の友人も春子の良妻賢母主義に傾倒していた。古市は山県に殉じて帝国大学を去ったが、鳩山は大隈重信に殉じて同じく帝国大学を去った。鳩山は弁護士として名声を高めたが、早稲田大学総長にもなれず、また、政党総裁、内閣総理大臣になれずに終わった。それに引きかえ、鳩山が去り、古市が去ったのちも帝国大学に残り、農科大学長、帝国大学総長をも勤めた松井直吉は、生涯を辛抱つよく大学人として生きぬいた。

斎藤修一郎とともにボストン大学に留学した菊池武夫は、司法省に入り司法卿の山田顕義に重用され民事局長になり、鳩山とともに最初の法学博士になり、将来を嘱目されたが、明治25年11月に山田が病死するや官途を去った。弁護士を開業し、法学博士、米国法律学士、代言人、従四位という肩書を新聞に広告する豪傑であった。24年12月には山田の推挙で勸選議員になっており、古市とは貴族院で心おきなく談笑できる間柄であった。

## 5. 将に将たるものは……

次々に開催される万国博について、古市公威は強い関心をもちつづけた。いつか日本で万国博を開こうと考えた人びとが博覧会倶楽部を結成していたが、その会長として古市は昭和5年8月に、総理大臣の浜口雄幸に対して昭和10年に東京、横浜地域で万国博を開くよう勧告した。海外からも多数の参加があれば、不況の打開、東西文明の融合もかなえられると考えた。まもなく浜口は東京駅頭で凶漢に拳銃で撃たれて仆れた。さらに、日本の軍部はアジアに戦争を拡大して、万国博を開催する気運は挫かれていった。暴走を始めた軍部における将に将たる人びとを、枢密顧問官の古市はどのような想いで見つめていたであろうか。

昭和9年1月に80才で病没するが、再起の見込みがなくなったとき、古市は長男を枕頭に呼んで次のように述べた。「伝記を書いてもらうほどの功績はない。もともと仕事というものは、一人でできるものでなく、多くの人びとの協力によって実現するものである。古市一人でなしとげたように書いて、他人の功勞を見失わせることは、後世を誤ることも甚だしい。伝記はそのようになりがちであるから、伝記をつくる話が持ち込まれても断わるようにと……」。将に将たるものは、つねに驕ることなく、歴史の大きい流れを見失うなど、古市は戒めているように思われる。古市の生きた時代は波瀾にみちており、高位顯官となった強烈な個性をもった豪傑たちを、幾人も身近に見つめてきた。若くして血気にはやったこともあったが、おだやかに中年、高年を生きぬいた古市から、読みとらねばならないことは少なくない。

## 参 考 文 献

- 1) 古市公威論を読むときに、常に参照すべき文献として下記に代わるものが、まだ公刊されていない。  
古市男爵記念事業会：古市公威、1937.7.
- 2) 拙稿を補足するものとして  
金関義則：歴史からみた分化と総合の基盤、土木学会誌、1968.1.  
金関義則：古市公威の偉き 1. みすず、1974.6.  
金関義則：古市公威の偉き 2. みすず、1974.7.  
金関義則：古市公威と土木学会の設立、土木学会誌、1975.1.  
金関義則：古市公威の偉き 3. みすず、1978.6.  
金関義則：古市公威の偉き 4. みすず、1978.9.  
金関義則：古市公威の偉き 5. みすず、1979.4.